



Title	狭衣物語の研究
Author(s)	倉田, 実
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44689
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	倉 田 実 ^{くら た みのる}
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 18854 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 16 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	狭衣物語の研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 伊 井 春 樹
	(副査) 教 授 後 藤 昭 雄 助教授 荒 木 浩

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、「序 狭衣物語研究の現在と本研究の意図」の後、Ⅰ「養女たちの位相」として 12 章、Ⅱ「狭衣の恋」として 5 章、Ⅲ「表現の位相」として 4 章からなり、400 字詰め原稿用紙にするとおよそ 1600 枚余という大作であり、それだけに労作ともいえよう。

まず「序」において今日の『狭衣物語』研究の現状と問題点を指摘し、多数存する伝本によって物語内容までも異なってくるだけに、本論文では通行の流布本を徹底的に分析することによって立論していく立場を明確にする。

中心をなすのは第Ⅰ部の養子女論で、『狭衣物語』の男女の主人公である狭衣、源氏宮自身が養子女として存在し、『源氏物語』の事例と明らかに異なることなどもあり、作品の成り立つ背景としての史実の養子制度をさまざまな資料(史料)から考察していく。歴史研究の成果を援用しながら、各種の古記録類、とりわけ『栄花物語』の詳細な分析を通じ、正編と続編とは成立時代の懸隔から養子女の制度が異なること、『源氏物語』と『狭衣物語』との両作品における養子女設定は、時代差によっていることなどを明らかにする。とりわけ、平安朝摂関時代の上流貴族社会における養子女は、両親や家ではなく、個人につくという事実を発見し、その重要性を指摘する。さらに貴族たちは、養親子関係を積極的に形成し、共同関係を構築していく様相にも言及する。そのほか、九条摂関家の特有な養子女のあり方、敦康親王を養子とした彰子縁組の背景、『源氏物語』における養子女の実態などを通して、具体的に『狭衣物語』の作品分析をしていく。源氏の宮は、堀川の上の個人の養女であるにもかかわらず、従来は「堀川関白の養女」とする解釈を修正し、今姫君については「他児養子」であることなどに注目する。

第Ⅱ部の「狭衣の恋」では、『狭衣物語』において中心的な存在である 5 人の女性との恋を、恋題を視点にして作品を読み解いていく。源氏の宮とは「言はで忍ぶ恋」、飛鳥井の君は「名を隠す恋」、女二宮は「逢ひて逢はぬ恋」、一品の宮は「濡衣の恋」、一品の姫宮は「形代の恋」と、それぞれ独自の狭衣との恋のありようを論じ、それによって『狭衣物語』の作品形成を考察していく。第Ⅲ部「表現の位相」では、「…人」する表現を通じて、登場する人物造型や相互の関係に及び、ほかに「ゆかり」が『源氏物語』とは異なること、「灯影」「月影」が登場人物によって使い分けられていることなどを論じていく。

論文審査の結果の要旨

『狭衣物語』は写本の数が多いために、本文系統も確立していなく、伝本の相互関係は複雑で、鎌倉期の古写本が必ずしもすぐれた本文を伝えているわけではないだけに、都合のよい本文を混用するよりも、近世に確立した流布本を用いての立論は、それなりの見識といえよう。『狭衣物語』の研究は一面活況を呈しているとはいえ、いずれも混沌とした本文を前にして閉塞的な状況にあるのは否めない。申請者は、従来の研究方法を踏襲しながらも、作中の主要人物がいずれも養子女であるという事実に着目し、その時代背景から作品の成立基盤や性格、時代的な意義を考察するという新しい視点を導入する。その過程で、歴史研究の成果を詳細に検討し、自らも古記録を渉猟し、とりわけ歴史物語としての『栄花物語』に見られる養子女の実態を知り、それによって『狭衣物語』を照射し、作品の時代的な意義を明らかにしていこうとする。その新見の一つに、養子女が両親や「家」に迎えられる概念ではなく、個人に属するという指摘があり、これは女主人公源氏の宮の運命を知る上でも貴重である。夫婦が同一の養子女を「家」に迎えるのは『狭衣物語』以降になってであり、この作品がその過渡期に成立したことなど、歴史的事実と物語の発生とを結ぶ指摘といえるし、ほかにも多くの発見により作品の読みに新しい知見を加えることになった。また、狭衣と源氏の宮などとの恋物語を、和歌題によって考察していく方法は、作品の新しい解釈と物語世界を知る上において斬新であり、表現論においても、詳細な用例の分析とそれぞれの意義づけは『狭衣物語』研究に有意義な成果であったといえる。

ただ、本論文の大半を占める養子女論は、歴史研究を背景にした文学研究として貴重な存在とはいえ、それが『狭衣物語』の作品の中心ではないだけに、もの足りない思いもする。また、恋の和歌題によって狭衣と女性たちの物語が必ずしも展開しているわけではないとか、表現論についても全体のバランス上内容に乏しいなどの感みはあるものの、新見に富む考察だけに、高く評価でき、研究世界にも大きな意義を持つものと判断し、本論文を博士（文学）の、学位にふさわしいものと認定する。